



ウォルトン
釣り雑誌『Walton』編集発行人

北原 一平さんに聞く

40歳の時に独立して出版を核にした編集プロダクションを設立し、世界的に名高い釣聖アイザック・ウォルトン卿の名を誌名にした釣り雑誌を創刊。釣りの世界に全てを注ぐ北原 一平さんに在学生在が取材しました。

今回の同志社人

北原 一平さん

〔1993年 法学部法律学科 卒業〕

きたはら・いっぺい 1969年生まれ、神戸市出身。本学卒業後、出版社編集局に勤務。文化誌や一般書の編集を長年にわたって手がけた後、独立して雑誌『Walton』の編集発行人として活躍中。

今回のインタビュアー

祖父江 亮吾さん

〔理工学部インテリジェント情報工学科 3年次生〕

そぶえ・りょうご 大阪府交野市出身。高校時代に経験した交通事故をきっかけに安全性を追求する「自動運転」の研究開発に関心を抱き、本学科を選択。アルバイトを通じて知ったハウスメーカーの営業職にも興味があり、就職分野を熟考中。釣りには小学校の頃から親しみ、現在、本学の釣研究会会長を務めている。

眼下に海が広がる須磨に住んだ少年の頃から釣りに熱中

祖父江 釣りには少年時代から親しんでおられたのですか。

北原 小学生の頃に父親から手ほどきを受けたのがきっかけで始めました。せがんで何度も連れて行ってもらいました。当時、『週刊少年マガジン』（講談社）に連載され、大ヒットした矢口高雄さんの『釣りキチ三平』を耽読し、釣り三昧の日々を過ごすようになりました。ブラジルやアマゾン川など世界を股に掛けた釣り師としても名高い作家開高健さんのベストセラー『オーパ!』（集英社）など

も同時に発表され、むさぼるように読みました。残念ながら、出会いの機会を得ることはできませんでしたが、心から敬愛しています。子どもの頃は、淡路島が眺望でき、眼下に船舶が行き交う須磨の鉢伏山の東方に住んでいましたので、瀬戸内海には格別の思い出があり、今でも釣りに出かけています。

祖父江 入学後は釣研究会に所属されたのですか。

北原 4年間、仲間と釣りを満喫しました。集まって語り始めると、もう止まらない。時が経つのを忘れて話し込んでいました。特に「合宿」が楽しかった。春とか、夏に3泊4日から